

安政二年十月二十四日巳刻(1855—XII—3, 10 時)

南海沖海域に発生した津波地震

都司 嘉宣(スクールIE 北小金校)

§1. 安政二年十月二十四日の南海沖津波地震

安政南海地震(1854)の発生後、約1年を経過した安政二年十月二十四日の巳刻(午前10時)頃、紀伊半島から九州にかけての海岸で、広範囲に津波が襲ったという記録がある。顕著な有感地震は伴っていない。

§2 紀伊半島の記録

紀伊田辺の大庄屋・田所古衛士の記録(武者、1951-94頁)に次のように記されている。

十月廿四日巳中刻(午前10時)過、急に潮差し込来たり。さし引き数度に及候に付、津浪にても可有之哉と、江川浦、古町、新地、網屋町、片町、紺屋町、本町、一統家中取片付、逃支度致し候。もつとも地震は一度もなし

最後の「もつとも地震は一度もなし」に注意したい。

§3 高知城下の記録

高知の「土佐国大地震并御城下大火事且大汐実録(新収5別巻5-2,2116頁)」の記載は次の通り。

十月廿四日潮水大ニくるい、日中五六度汐之指引有之。因而是諸人大ニ恐れ、御城下之人を初志テ郷廻り之人々遁支度等致者有、諸道具を運び、或焼飯弁当相調居候処、震り、潮共別条なくとあって、高知城下だけではなく郷(郊外地)の人まで津波の居住地への来襲を予測、警戒している。「震り、潮共別条なく」とあるので、特に目立って大きな有感地震はなかったと判断される。

同じく高知では浜田三悦の日記が「修史余録十二地誌篇(新収5-別5-2-2156)」に引用されている。

安政二年十月二十四日の記録に次のようにある。

廿四日曇昼より晴、震一度、汐甚シククルウトテ人皆騒グ

この文でも高知城下の人々が津波の来襲を予測して騒動していることが記録されている。ここに「震一度」とあるが、この有感地震が本稿で取り上げた津波と関係があるかどうかについては判然としない。

§4 高知県土佐市宇佐の記録

宇佐橋田の真覚寺の僧・井上静照の記した「地震日記」には、十月二十四日と二十五日の項に次のように記されている。(新収5-別5-2-2277、および原文)

廿四日、朝五ツ(午前8時)頃雨やむ、四ツ頃(午前10時)より晴ル。九ツ半時(午後1時)ゆる小

廿五日、晴天(中略)、今朝五ツ半頃ゆる小、昨夜波幾度もくるひしとて何方よりいふ共なくまた汐の入来たるとて宇佐中荷物をまた山へ運び大騒動。浜辺のものは松明(たいまつ)を灯し曉まで波打際を往反して汐を伺う者あり。

この記事によると、宇佐ではこの津波は、24日の夕刻から25日の早朝にかけて気づかれている。

同じ宇佐の福島でも「大変略記」(武者 1951-p198)

に、「廿四日汐狂満て無事」と記されている。

§5 豊後佐伯の記録

前述の「地震日記」の同年十一月十四日の記事に、九州豊後国佐伯から宇佐に帰郷してきたものの話として、次のように記されている。

十一月十四日(中略)此節九州より帰帆ノ男の嘶を聞クニ、豊後佐伯辺此節地震すべてなし。ただし十月廿三日四日之頃波平生ト違ひ狂ヒ有之ニ付人々騒ぎ候由。

この記事によると、安政二年十月二十四日の津波は大分県佐伯でも気づかれているのである。

§6 津波の記録地点

安政二年十月二十四日の津波の記録地点と、各地点でのおよその推定浸水高さを図に示しておく。

